

梁川剛一の北海道版絵本について

柴 村 紀 代

〈はじめに〉

梁川剛一と言っても知っている人は少ないが、函館観光には欠かせない函館山の麓にある高田屋嘉兵衛の銅像の制作者である。高田屋嘉兵衛（1769-1827）は江戸時代後期の回船業者として箱館（現函館）の基を築いた功労者である。今、高田屋通りと名付けられたグリーンベルトに巨大な銅像が函館市内を睥睨している。その他、北海道大学のクラーク会館にはクラーク博士の「ボーイズ・ビー・アンビシャス」の大レリーフが飾られている。又、長崎のグラバー邸に建つ三浦環の「お蝶夫人」像など彫刻家としての梁川剛一は、一方で戦前の講談社絵本を支える挿絵画家としても有名であった。その梁川が、戦後の一時期、疎開してきた札幌で絵本を出していたことはほとんど知られていない。梁川剛一の北海道版絵本がどのようなものであったかについて考察した。

〈梁川剛一の履歴〉

梁川剛一は 1902（明治 35）年函館市で生まれ、札幌の北海中学（現北海学園高校）を卒業後、東京高等工業学校（現東京工大）を受験したが失敗、たまたま上野博物館の吉田三郎の彫刻「老鋤夫」を見て感動、東京美術学校（現東京芸術大学）彫刻科塑造部に入學し、北村西望、建畠大夢、朝倉文夫等の指導を受けた。在学中に第 1 回帝展に「競技」を出品、初入選し、新聞紙上で「ロダンの血が通っている」と表され、以降彫刻の「審判」「懊悩」「幽昏」等で何度も入選し、大学を首席で卒業、彫刻家として将来を囑望された。1934（昭和 9）年、彫刻「平和工作の響き」帝展特選、以後無鑑査となる。

卒業後、函館の実家に約一年妻子と共に寄寓しているときに函館図書館の岡田健蔵（1883-1944）らと知り合う。この間の函館奇遇時代のことを、北海道新聞に「私のなかの歴史」の中で回想している。¹ 当時の図書館はまだ私立図書館で、1928（昭和 3）年 7 月市立図書館となり、1930（昭和 5）年から 19 年まで岡田健蔵は市立函館図書館の館長を務めていた。これらの縁で、帝展入選の「競技」と「審判」が図書館に展示され、また函館の大商人高田屋嘉兵衛の像の依頼を受け 1933 年完成する。

1929 年再度上京後生活のため、31 年 4 月号に小学館の「せうがく三年生」に擬人画「動物の花見」を手がけ、その後、「少年倶楽部」の挿絵で人気を集めた。36 年には久米正雄「黒い真珠」、南洋一郎「魔海の宝」等の連載、3 月号の特別付録「敵中横断三百里」（山中峯太郎・作）で樺島勝一の補充分を担当。その後、江戸川乱歩の「少年探偵団」、「妖怪博士」、「新宝島」と続き、その間に読売新聞、北海道新聞等の連載小説の挿絵を担当。37 年には東京の東中野にアトリエを新築するまでになった。

絵本の仕事としては、37 年「講談社の絵本 28」に「リンカーン」（池田宣政・文）を油彩、4 色刷で出し大きな反響を呼んだ。その他、「巖窟王」「三銃士」「鉄仮面」の挿絵を手がけ、以後、世界名作物語、伝記物語など多くの挿絵で活躍した。1975 年「梁川剛一挿絵大集」を講談社から出版、1986 年 4 月 26 日、84 歳で死去。没後「梁川剛一記念美術館」が東中野に開館したが、1989 年 11 月末で閉館した。

I 戦前の活動状況

1) 挿絵画家の時代

梁川剛一を挿絵画家として不動のものにしたのは、「少年倶楽部」の挿絵の仕事だった。「少年倶楽部」は1914（大正3）年の創刊以来、昭和に入って「血沸き肉躍る」少年冒険小説が人気を博し、その物語にふさわしい画家として梁川剛一への注文が増えていった。「敵中横断三百里」（山中峯太郎・作）は、1930（昭和5）年、樺島勝一の挿絵で少年倶楽部に連載されたが、1936（昭和11）年別冊として発行するとき、樺島勝一との競演の形で挿絵を担当。樺島の絵が静的な密描画に対し、梁川は意識的に動きのある、躍動的な絵をねらって描かれたことが好対照として評価された。1937（昭和12）年、江戸川乱歩の「少年探偵団」の連載の挿絵では、明智探偵を小型の彫刻で作り、それを上や下から観察して描いたという。「少年探偵団」の好評は、梁川のリアルでかつ冷静な観察による迫真の絵に負うところも大きかった。

2) 「講談社の絵本」時代

「講談社の絵本」は1936（昭和11）年12月から毎月4冊を同時発売し、1942年4月の終刊まで203号という多数を刊行した戦前・戦後を通して最大の絵本叢書である。第一回配本は各刊40万部、計160万部を発行。定価も当時の絵本としては破格の35銭で、その後売れるに従って45銭、50銭と値上げし、戦後の復刊を含め総数7000万部という空前の講談社絵本全盛時代を築いた。²

梁川剛一の講談社絵本の最初は1937年7月発行で28巻目の「リンカーン」（池田宣政・文）である。先の北海道新聞の「造形六十年」の中で、このときの意気込みを次のように語っている。

「講談社の絵本」はそれまでずっと水彩でやっていたのですが、「リンカーン」はどうしても油でやると私が主張したので編集主任の加藤謙一さんも困ったようですね。製本コストの制約で水彩でやるといふ社の方針があったのでしょうか。しくじったらクビになるかも知れないと加藤さん深刻でしたが、これからの絵本は赤本みたいな感じじゃいけない、もっと高級な油絵で行くべきだという私の主張をわかってくれて、野間社長を説得してくれました。

その結果、全80頁の内見開き32枚と表紙絵を全部15号の油絵で仕上げるという見事なできばえとなった。「これは『講談社の絵本』の中でも最もよく読まれた一冊で、1930年前後に生まれた人で、この本を少年時代の思い出の本としてあげる人が少なくない」と言われた。³ その他、1939年6月刊行の「廣瀬中佐」（橋爪健・文）は、日露戦争で旅順港内のロシア艦隊を封じるため、旅順港閉塞作戦で戦死した廣瀬中佐を描いたもの。この話は1912（大正元）年文部省唱歌で歌われ、よく知られた話だが、梁川剛一の筆によっていっそう緊迫感のある迫真の絵本となった。共作ではなく単独での絵本はもう1冊、「ヒットラー」（池田林儀・文1941年8月）がある。全68頁中表紙他すべて梁川の絵で、表紙はハーケン・クロイツの旗を背景に右手を挙げたヒットラー総統の絵。圧巻は敵の戦車のキャタピラが鉄条網をなぎ倒す場面を下からのアングルで大きくとらえた絵で、人物描写の的確さと共に、戦争場面の迫力も定評のあるところだった。「講談社の絵本」は、当時の戦争へと傾斜していく時代を背景に軍事絵本と言われる戦争賛美の絵本が数多く発行された。梁川剛一も例外ではなく、39巻「忠勇美談」、46巻「支那事変・武勇談」、50巻「支那事変・大勝記念」、54巻「支那事変・奮戦大画報」、57巻「支那事変・大手柄」60巻「忠勇感激美談」等見開き頁に華麗な挿絵を展開した。

3) 梁川剛一の札幌時代

1945年5月の空襲で住まいを消失した梁川は7月に妻の実家を頼って札幌に疎開した。その後49年6月に帰郷するまでの4年間梁川は北海道の文化活動に大きな足跡を残した。

梁川の札幌での絵本はエルム社から出版された。戦後、札幌の出版界は東京の出版社や印刷所が戦災で壊滅的な打撃を受けたため、戦後の一時期127社を数える出版社が誕生した。エルム社もそのひとつで、代表者の藤井準一は戦前、事務用品、文房具などを扱っていた経営者で、そこに札幌師範時代から

口演童話で活躍した塚本長蔵や、小学校長で札幌子供の友会を作り子供会活動に従事していた太田武と梁川の四人が戦後に立ち上げた出版社である。⁴

梁川以外は絵本作りにシロウトの中で梁川は印刷所に出向き、紙の粗末さや印刷機械の古さにもめげず、自らの経験を生かして線や色彩など細かく指示を出していたという。

II 北海道版絵本の特徴

1) 当時の札幌の出版・印刷事情

この項は、札幌の興国印刷に勤めていらした菅原武氏にお話をお聞きした。興国印刷は1998(平成10)年に「興国印刷小史 九十年のあゆみ」を発行し2004(平成16)年解散した札幌では大手の印刷会社であった。この中に「興国印刷と戦後本道の出版ブーム」(平澤秀和・文)の項があり⁵、敗戦直後の札幌での出版事情をかいま見ることができる。1945(昭和20)年8月15日、日本が敗戦を迎えたとき、戦争終結の開放感から急速な活字文化への希求が起こったが、度重なる空襲で焦土と化した東京、大阪ではそれに答える出版業界は空襲によって壊滅的な打撃を受けていた。幸い北海道は戦災の被害も少なく、製紙工場も無傷で稼働しており、印刷所等の被害も少なかった。そこで東京・大阪の出版社が一時期札幌での印刷を試み、本道でにわかな出版ブームが起きた。

当時の「出版年鑑」(昭19・20・21合併号)によると、1946(昭和21)年4月現在、札幌の出版社数21社に対し、翌年の1946(昭和22)年5月には札幌で86社、翌々年には97社と驚異的な増加をみる。この中には講談社など大手の出版社が東京での印刷ができないため、札幌の印刷所で印刷を引き受けたものもある。興国印刷でも講談社発行の戦後のベストセラー・永井隆著「この子を残して」を印刷し、道内で2万部を売り尽くしたという。

さて、梁川が疎開してきて一緒に立ち上げた出版社は全くのシロウト集団だった。先の「造形六十年」⑨〈札幌の疎開生活〉に次のような叙述がある。

「藤井準一という紙屋さんが軍放出の紙を大量に抱えていて、共同で子供の絵本をつくらないかという。退職校長や現職の学校の先生、また地方の学校を回って講談調の教育講演をして歩く塚本長蔵さんという人も仲間に入れて「エルム社」という、まあ出版社をつくったんですね。紙は粗末で印刷もおそろしく旧式なものだったが、ピノキオとかグリムとか、とにかく毎月子供の絵本をつくってたんです。絵はほとんど私一人でやりました。これが結構商売になって、かなり遠方からリュックを背負って仕入れに来るんですね。交通が不便なところだったのに。文化の香りにみんな飢えていたんですね。」

当時の札幌の印刷機械は活版印刷が主流だが、すでにオフセット印刷⁶の技術は入っており戦後の出版ブームの中で急速に各社の導入が始まっていた。梁川の文には「紙は粗末で印刷もおそろしく旧式なものだった」とあるので、おそらく当初はオフセット印刷以前の平台印刷⁷だったと思われる。興国印刷にも昭和30年代にはまだ平版製本課があって、画工さんが手工業的技術で書き版色分けし、細かく色を指定しチャイナという型上げ用転写紙を使って製版していたという。しかし、エルム社の発行部数が5000~10000部も短期間に発行されていることから、やがて平台印刷ではなくオフセット印刷機を使い始めていたのではないかと推察される。製版にフィルムが使われたのは「製版用カメラ」が入った昭和36年頃からである。興国印刷ではその頃、平版製版課が写真製版課に変わっている。

2) コドモ絵本

エルム社の絵本には、幼児向きの「コドモ絵本」(隔月発行)と少年少女向き(小学校3・4年向き)の「絵本よみもの」(毎月発行)とがあった。最初の絵本は「コドモ絵本」の「土の唄」(1946年5月)(図1)で、内容は「オオサム コサム」や「ユキヤ コンコン」など童歌や童謡である。画家は新妻清、野村秀雄と梁川剛一の3人で、クマのぬいぐるみを抱いた女の子の表紙は記名はないが、梁川剛一の絵と思われる。見開き6ページの体裁は大正期の絵雑誌「コドモノクニ」の作りになっている。線と彩色にズレがあったり(図2)、バックの色がにごっていたりと最初の絵本はまだ印刷のたどたどしさ

が顕著だ。それでも色は多色使いで、表紙の赤も「コドモエホン」の文字の色とクマのリボン、女の子の洋服の色と濃さを変え、クマの青に対し、背景の青は薄くぼかすなど工夫の跡がうかがえる。「コビト」(1947年3月)(図3)から絵は梁川一人になり、梁川の北海道版の特徴である黒の輪郭線がはっきりと現れている。⁸ 幼児絵本を意識して、表紙のネズミにまたがった騎士の顔が幼い。ガリバー(図4)の細部やガリバーを取り囲むコビトの群像はさすがに描き慣れて安定している。中に北海道らしい絵として「コロポックル」(図5)の絵が入っているが、印刷はあまり鮮明ではない。1948年5月の「あいうえ王のかぎ」(図6)は文も梁川剛一だが、ウマはさすがに写実的だが、残念ながら梁川の得意とする躍動感や臨場感が発揮されていない。(図7)。コドモ絵本は全部で6冊あるが、シリーズ名の「コドモ絵本」の表紙も統一されていず、頁はおおむね16頁で見開き2ページ1話の雑誌形式を取っている。定価は戦後の物価高騰の時期のため、出る度に値上がりし、最初16頁3円50銭から、4円、8円、10円、12頁20円とあがっている。印刷は年を追うごとに鮮明になってきているが、幼児向きでは梁川の得意とする躍動感や臨場感が発揮できず、平凡な絵になっている。

3) 絵本よみもの

「絵本よみもの」と付けられた小学校3、4年生向けの絵本になると24頁1話となり、人物の動きや顔の表情など梁川らしい生き生きとした絵になっている。「アリババと四十人のとうぞく」(1946年11月)(図8)の表紙は黒をバックにすっきりと立った人物像で、この人物はアリババではなく盗賊の頭の勇姿である。幼児絵本では誤解を招くのでこういう手法は使えないが、少年少女向きならでは効果をおねらっている。活字と絵の配分も変化に富み、「コドモ絵本」に比べて梁川剛一の本領が発揮されている。表紙と裏表紙、4頁、21頁の4枚が多色刷り、他20頁が3色刷となっている。そのため見開きの片側が多色刷り、片側が3色刷りになる場合があるが、そのつなぎ方が非常に自然で梁川の製本を考慮した絵の描き方や色の指定の巧みさが改めてうかがえる。「この努力 この栄冠」(1947年4月)(図9)の本文はアメリカ大統領ガーフィールドや盲目の琴奏者今井慶松などで彫刻家の話はない。しかし、彫刻家の梁川は表紙にどうしても巨大な塑像を彫る少年を描きたかったのだろう。みごとな塑像の表紙が印象深い。「ぼくらの放送局」(図10)、「犬物語」(図11)の表紙に大きく少年の顔が描かれているが、少年の顔を描くのは、戦前の「少年倶楽部」の表紙でお馴染みであり、また戦後北海道の児童雑誌「北の子供」の表紙絵も男女二人の子供が毎回描かれている。「犬物語」の少年の顔と「土の唄」の少女の顔はよく似ている。

「コーカサスのほりょ」(1947年8月)(図12、13、14、15、16、17、18)

梁川の北海道版絵本ではこれが最高傑作だろう。表紙の少女の人形を愛でるたおやかな笑顔や、躍動感あふれた馬での追跡場面など、梁川の本領が遺憾なく発揮されている。コザック兵とダットン人との戦闘を描いた異国の話だが、敵に捕まったり、脱走したりした際の緊迫感とかくまってくれた村のかわいい少女の絵が表紙に使われるなど硬軟使い分けられた筆致が見事である。

4) 挿絵—北海道出版社の絵本

北海道出版社は「北海道出版物総合目録」に代表者、所在地などの記載があるだけで詳しいことはわかっていない。青少年世界名作絵本と銘打たれ、「巖窟王」(1947年6月)(図19、20、21、22,)、「鉄仮面」(1948年4月)(図23、24)の2冊が確認できた。2作とも原作はフランスの作家アレキサンドル・デュマであることが、裏表紙に解説付きで書かれているが、表紙には文は椿達彦となっている。装丁に工夫がなされ、飾り文字や大胆な飾り罫の赤と黒の色彩が鮮やかだ。札幌時代は、戦前の東京での挿絵の原画だけを渡す仕事から、印刷全体に関わらざるを得ず、そこから装丁にまで梁川の細かな配慮がうかがえる。頁前半部に絵本のように絵中心の頁をとり、文は下段にローマ数字行で記され、後半に読み物頁を設けるという大胆な試みがなされている。

5) 紙芝居

梁川剛一は札幌時代にだけ紙芝居を手がけている。この紙芝居については、谷暎子が前述の「ヘカッチ」1号で触れているが、今回確認したのは現在、北海道文学館に展示されている「ウィリアム・テル」(図25、26)と、「フランダースの犬」(図27)の2作である。ここでも札幌時代に特徴的な黒の輪郭線が多用され、遠目を引く紙芝居での効果が計算されている。色彩も鮮やかで、躍動感のあるタッチと鮮明な色彩が印象的だ。

6) 児童雑誌「北の子供」の表紙絵

1946(昭和21)年4月、北海道の児童のための雑誌「北の子供」が創刊された。戦後、いち早く子供のための雑誌が創刊されたが、「北の子供」は東京で創刊された「赤とんぼ」(実業之日本社)、「子供の広場」(新世界社)と同時期の創刊であり、その後「赤とんぼ」等次々と終刊していく中で、1950(昭和25)年1月まで全38号を発行した。この38冊中30冊が梁川剛一の表紙である。これらの表紙は男女子が季節毎の装いをして描かれたもので、戦前の雑誌を踏襲するものであるが、明るく健康な姿の中に北海道らしい季節感がよく描かれている。梁川は1949年6月に帰京しているが、その後も東京から表紙絵を書き送っていたという。

以上、梁川剛一の北海道絵本の特徴について触れてきたが、戦後の一時期、戦災のため東京の印刷業が成り立たなかった期間、札幌で盛んに行われた出版に梁川剛一が関わり、北海道で絵本が印刷・出版されていたことは驚きであった。これを可能にしたのが、疎開してきた梁川剛一が本道出身者であり、子どもの本に著名な画家であったことが幸いしたことであった。わずか4年間という短い期間ではあったが、本道の子どもとの関係者に与えた影響は大きく、今後、北海道印刷史との関わりについても調査を進めたい。

注

- 1 梁川剛一・聞き手池川包男編集委員「私のなかの歴史 造形六十年」北海道新聞1983年8月5日～8月20日まで12回連載。
- 2 阿部紀子「講談社の絵本の功罪」p122-139 『はじめて学ぶ日本の絵本史II』鳥越信編 ミネルヴァ書房2002年
- 3 阿部紀子「講談社の絵本 ― 偉人伝」p148-149 『はじめて学ぶ日本の絵本史II』鳥越信編 ミネルヴァ書房2002年
- 4 谷暎子「梁川剛一 戦後復興期に児童文化活動に携わった人々」「ヘカッチ」1号 北海道子どもの文化研究同人 1994年
- 5 平澤秀和「興国印刷と戦後本道の出版ブーム」p65-81 『九十年のあゆみ ― 興国出版小史 ―』平澤秀和編・著 興国印刷(株)1998年
- 6 オフセット印刷
オフセット印刷は、刷版にインキをつけた後、刷版からブランケットというゴム製の間転写体にインキを転移させ(offして)、ブランケットから用紙などに印刷する(setする)。版から直接印刷せず媒介物を介して印刷するのでoff setという。これによって大量・鮮明な印刷が可能になった。
- 7 平台印刷・平版印刷
印刷製版には、1、凸版印刷、2、平版印刷、3、凹版印刷がある。1は凸部へ印刷インキをつけ、紙を押しつけて印刷する。古くからの木版印刷や文字の印刷の活版印刷はこれである。2は凹凸のない平版に水と油の反発を利用して行う印刷法。その元になったのが石版印刷(リトグラフ)で、石版の代わりに金属版(亜鉛版など)を用いる印刷法。3は1と逆に版面の凹んだ部分にインキが入る印刷方法。有価証券などに用いられる。平台印刷とは、亜鉛版を使ったジंक平版などの版型を印刷する方法で、オフセット印刷までの主要な印刷方法だった。
- 8 吉崎元章「挿絵の中の彫刻家の眼」p7-9 『梁川剛一さしえ展図録』芸術の森美術館・編集助札幌芸術の森1991年

表1

分類	タイトル	発行日	発行所	文	絵	定価	頁数	判型	所蔵
コドモ絵本	土の唄	S21/5/22	エルム社	わらべうた	梁川剛一他	3円50銭	16頁	B5版	梁川美恵子
コドモエホン	みどり児の歌	S21/9/25	エルム社	板谷節子	梁川剛一	4円	16頁	B5版	コピー・谷
絵本アラビアンナイト	アリババと四十人のとうぞく	S21/11/5	エルム社	塚本長蔵	梁川剛一	5円	24頁	B5版	梁川美恵子
絵本よみもの	不屈魂	S21/12/5	エルム社	塚本長蔵	梁川剛一	10円	24頁	B5版	梁川美恵子
絵本アラビアンナイト	シンドバットの冒険	S22/1/30	エルム社	塚本長蔵	梁川剛一	6円50銭	24頁	B5版	梁川美恵子
コドモ絵本	コビトノクニ	S22/3/5	エルム社	塚本長蔵	梁川剛一	8円	16頁	B5版	梁川美恵子
絵本よみもの	この努力この栄冠	S22/4/1	エルム社	塚本長蔵	梁川剛一	8円	24頁	B5版	梁川美恵子
コドモ絵本	絵本イソップ	S22/6/14	エルム社	塚本長蔵	梁川剛一	4円50銭	24頁	B5版	梁川美恵子
挿絵	巖窟王	S22/6/20	北海道出版社	椿 達彦	梁川剛一	30円	36頁	B5版	梁川美恵子
コドモエホン	ピノチオ	S22/7/20	エルム社	塚本長蔵	梁川剛一	10円	16頁	B5版	コピー・谷
絵本よみもの	コーカサスのほりょ	S22/8/5	エルム社	椿 達彦	梁川剛一	30円	36頁	B5版	北海道立文学館
絵本よみもの	紅ばら白ゆり	S22/8/20	エルム社	塚本長蔵	梁川剛一	13円	24頁	B5版	梁川美恵子
絵本よみもの	ぼくらの放送局	S22/9/25	エルム社	塚本長蔵	梁川剛一	15円	20頁	B5版	梁川美恵子
絵本アラビアンナイト	アラジンのランプ	S22/12/20	エルム社	塚本長蔵	梁川剛一	15円	20頁	B5版	梁川美恵子
絵本よみもの	宝くらべ	S23/2/20	エルム社	塚本長蔵	梁川剛一	15円	24頁	B5版	コピー・谷
挿絵	鉄仮面	S23/4/1	北海道出版社	椿 達彦	梁川剛一	40円	36頁	B5版	谷
コドモエホン	あいうえ王のかぎ	S23/5/10	エルム社	梁川剛一	梁川剛一	20円	12頁	B5版	梁川美恵子
絵本よみもの	犬物語	S23/8/1	エルム社	塚本長蔵	梁川剛一	20円	20頁	B5版	梁川美恵子
はやがわりエホン	のりもの	S23/8/1	エルム社	不 明	梁川剛一	25円	12頁	B5版	コピー・谷

紙芝居	ヴェニス商人	S23/7	新日本文化協会	椿 達彦	梁川剛一
紙芝居	アラジンのランプ	S23/9	新日本文化協会	塚本長蔵	梁川剛一
紙芝居	巖窟王	S23/6	新日本文化協会	椿 達彦	梁川剛一
紙芝居	宝島	S23/8	新日本文化協会	椿 達彦	梁川剛一
紙芝居	ウィリアム・テル	S23/9	新日本文化協会	塚本長蔵	梁川剛一
紙芝居	フランダースの犬	S23/11	新日本文化協会	椿 達彦	梁川剛一



图 1



图 2



图 3



图 4



图 5



图 6



图 7



图 8



图 9



图 10



图 11



图 12



图 13



图 14



图 15



图 16



图 17



图 18



图 19



图 20



图 21



图 22



图 23



图 24



图 25



图 26



图 27